

大学生に求められる外来語語彙の レベル別整理を目指して

—スポーツ紙の芸能面を用いた一試み

Toward a Level-based Organization of Foreign Vocabulary Required of University
Students: One Attempt to Use the Entertainment Section of a Sports Newspaper

OTSUKA Misa

大塚 みさ

日本語コミュニケーション学科教授

抄録：

外来語の数の多さや意味の分かりづらさがしばしば話題となっている。公共性の高い場面での外来語の使用や、「外来語弱者」と呼ばれる高年層には配慮が必要であることは言うまでもないが、これから社会で活動する大学生には、必要に応じて馴染みのない外来語を積極的に習得する姿勢が求められるのではないだろうか。本稿では、その一助となる教材の開発に必要な外来語語彙のレベル別整理を目指した試みを報告し、その検証と今後の課題の検討を行う。

Abstract：

The problems of large number of loanwords and the difficulty of understanding their meanings have often been addressed. While consideration for public situations and the elderly is of course necessary, university students who are active in society need to be willing to learn unfamiliar loanwords as needed. This paper reports attempts to organize loanword vocabulary by level, which is necessary for developing tools to help in this process and examines the validation and future challenges.

キーワード： 外来語／カタカナ語、大学生の語彙力、理解語彙、表現語彙、スポーツ紙

Keywords： loanwords, college students' vocabulary, receptive vocabulary, expressive vocabulary, sports newspaper

1. はじめに

外来語は、「意味が分かりにくい」ものとして批判的意見が持たれることが多い。その一例は、高齢者を中心とした新聞の投書欄に寄せられる意見や、2014年に70代の男性がNHK 感謝料の支払いを求めた訴訟などに見られる通りである。

この傾向は数値からも把握できる。文化庁が毎年実施する「国語に関する世論調査」は定期的に外来語についての見解を尋ねているが、これを取り上げた直近の調査（2017年度実施）では「外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか」という問いに83.5%が「ある」（「よくある」23.8%、「たまにはある」59.7%の合計）と答えており、5年前の調査結果と比べて5pt増加している。

しかしながら、一言で「外来語」と言っても日本語に十分定着・普及したものから理解が困難とされるものまで幅が広く、当然ながらその理解度や使用度には年齢層などの属性が大きく影響している。例えば上記の世論調査結果では「よくある」は70代以上で37.9%、60歳代で29.3%とその他の世代を大きく上回り、30歳未満の若い世代では「よくある」は12%台にとどまる。世代により接する外来語の量やその特性が異なるため単純に比較することは難しいが、外来語の使用に関する方針には世代による違いを考慮する必要があると言えよう。

筆者は、大学生の語彙力向上の糸口を探る目的でさまざまな試みを行ってきており、特に馴染みの薄い外来語を、理解語彙、表現語彙として定着させるための方策を探究してきた。本稿では、現在計画中である外来語習得のための教材開発に必要な外来語語彙のレベル別整理を目指した試みに関連して、以下の3点の課題を検討することを目的とする。

- (1) スポーツ紙の芸能欄に出現する外来語を、基本的なレベルの外来語データとして使用することは妥当であるか。
- (2) (1) の検証方法として非日本語母語話者対象の日本語学習語彙との照合は有効か。
- (3) (1) が妥当だとみなされる場合、その中から大学生には習得不要な外来語の範囲をどのように定めるべきか。

以上を検討した上で、今後の課題を整理する。

2. 外来語の現状と外来語政策

はじめに、「外来語が増えている」という点をデータで確認したい。

中山（2015）は、「外来語は増加しているのか」という視点で、定着度の高い語を掲載する国語辞典や公共性の高い新聞、外来語が多い雑誌における外来語の増加傾向を考察している。このうち国語辞典の見出し語における外来語の比率については林（1982）¹に基づいて『例解国語辞典』（1956）の3.5%、『角川国語辞典』（1969）の7.8%、そして『新選国語辞典 第九版（2011）』の9.0%をあげ、各辞書の性格等の違いがあることを断った上で外来語の増加傾向を確認している。

この『新選国語辞典』が第八版（2002）から語種統計結果を公表している点に注目し、第八版から第十版（2022）までの語種統計の推移をグラフにまとめて以下に示す。

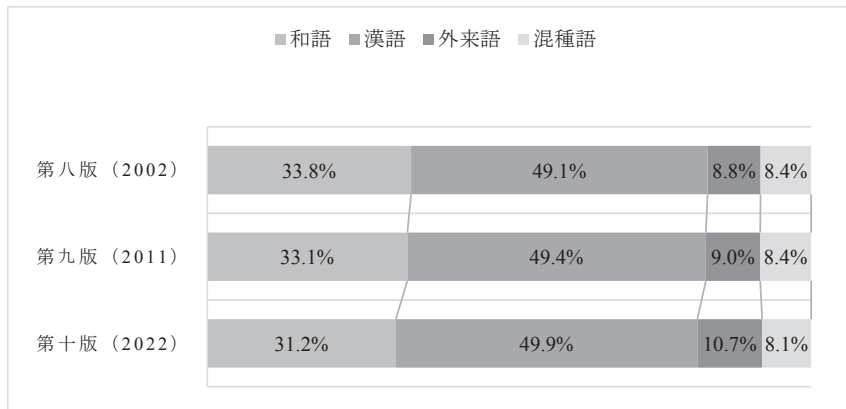


図1 『新選国語辞典』第8版～第10版の語種別分類推移

20年の間に外来語と漢語が漸増し、その分和語が減少している傾向が把握できる。外来語については、第八版から第九版では0.2ptの増加に過ぎなかったが、第九版から第十版にかけては1.7pt増加している。また、外来語の収録語数については第八版が6,415語、第九版が6,886語、そして第十版が8,555語であり、やはり第九版から第十版にかけて増加ペースの速さを感じられる。

辞書の改訂時に追加される新語には、従来から一定数の外来語が含まれる傾向が認められるが、この10年の間にはICTやSNSに関連する外来語、そしてジェンダー問題に関する外来語の増加が目につく。特に2000年下半期以降に改訂された国語辞典では、「エッセンシャルワーカー」や「ソーシャルディスタンス」などに代表される新型コロナウイルス感染拡大に関連する語の追加が目立つ（大塚 2021、2022）。

茂木（2019：38）は辞書のほか、雑誌、新聞、小説における外来語の調査・研究に基づいて考察を行い、外来語の量的傾向を以下の3点にまとめている。

- 全体的な傾向として外来語はどの媒体でも増加している。
- 増加のプロセスには急増期と漸増期が見られ、媒体によって増加のあり方（タイミング）が異なる。
- 外来語は、高頻度語の層よりも低頻度語の層でその割合が高い。

このうちcについては、先行研究での指摘を踏まえて「入れ替わりの激しさ」に言及し、これを日本語使用者の視点から見た場合に「氾濫」状態に感じられても不思議はないと述べている。

この「氾濫」という点はしばしば問題視されてきたが、国の言語政策における外来語に関する問題の扱いは、1991年告示の『外来語の表記』でその表記の整理を行ってきた程度で、漢字政策やかな政策等の文字表記に関する問題と比較すると軽い扱いであったととらえられる（陣内 2007：113）。その後2000年の国語審議会答申は「外来語・外国語増加の問題」について官公庁や報道機関に受け手への配慮要請を行い、具体的な配慮方法を3段階（そのまま使用する、言い換える、注記する）で提示した。そして2002年には国立国語研究所に「外来語」委員会が設置され、公共性の高い場面における分かりにくい外来語176語を分かりやすくするための言葉遣い

の工夫が、2003～2006年の間に4回、社会に向けて提言・発信されている。その通称「『外来語』言い換え提案」は社会発信のための便宜を優先して採用されたものであったが、実用的な観点からの「言い換え語リスト」と誤解され、提案語数の少なさの批判がしばしば寄せられた（相澤2012：141-143）。しかし、本来は「分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫」に有効な留意事項の提示に重点が置かれていたものであった（同上）。

一方、特に言い換え語の大半が漢語である点については、その同音語や類音語の多さによる問題が増幅する点（野村2004、山口2006）などの指摘や、介護現場では漢語による言い換え語とは別の、話し言葉に適した和語で言い換える例もあるとの指摘（中山2003）がなされている。

言い換え提案は、同世代に生きている人同士のコミュニケーションに支障が起きている現状を放置すべきではないという基本的な共通認識のもとに行われたものであり（相澤2012：141）、この点は当然重視されるべきである。一方、今日のビジネス現場では業務やコミュニケーションにおいて外来語がそのままの形で多く用いられているのが実情である。この点では、若い世代、特に将来社会で活動する大学生には、自分とその語との関係を把握しつつ意味を理解し、必要に応じて使用語彙として定着させていくことが望ましいと考えられる。言い換えれば、若い世代は「分かりやすいことば」での言い換えを待つだけではなく、自ら「分からない語」への理解を深めるべきではないだろうか。

大塚（2019）は、大学生がスマートフォンを辞書の代替物として活用する点に着目し、「初めて見る語」や「意味の分からない語」のサンプルとして外来語を取り上げて調査を行っている。学生たちが教室内外でスマートフォンの諸機能を活用して意味を調べる様子をモニタリングしたところ、理解語彙の習得への有用性は確認できたが、表現語彙の増強については異なるアプローチが必要であるという傾向が把握された。

こうした経緯を踏まえて、筆者は日本語母語話者の大学生が習得すべき外来語をリスト化し、その語義や使用例、対応する和語や漢語との意味・ニュアンスの相違を簡便に知ることのできる教材開発の整備を進めている。具体的には、表1に示すように4～5,000語程度の外来語を収集し、4段階に分類することを想定している。

表1 外来語のレベル別分類案

レベル	語数	本研究での位置づけ	特徴	語例
1	約500語	理解語彙としての定着を目指す	外国語の趣 ² が強い 特定の分野で使用	アウトロー、エスクロー、 コモディティ、ナッジ
2	約1,000語	使用語彙としての定着を目指す	外国語の趣が強い 略語での使用が多い	アジェンダ、スキーム、 センシティブ、フェーズ
3	約2,000語	大学生の8割が理解・使用可能	一部の語に外国語の趣が残る	シンボル、セレモニー、 フィクション、マクロ
4	約1,000語	全大学生が理解・使用可能	外国語の趣は希薄である	テレビ、パン、グループ、 サービス、ルール

レベル4は、すべての大学生が理解・使用可能な外来語であり、具体的事物を指す語や、使用頻度の高い抽象語を含む。これらは日本語語彙として十分に浸透しており、他の語種による言い換えが不可能な「新物新語」(陣内 2007:12)、あるいは言い換えた場合に意味やニュアンスの相違が大きいものである。それだけに外国語の趣は希薄であり、使用による外来語特有の表現効果が発揮される可能性は小さい。また、これらの大半は、日本語学習者が習得を目指す語彙と重なりと考えられる。これについては後述する。

レベル3は、レベル4よりも若干理解度、使用度が下がる語群であり、事柄や制度等を表す抽象的な語が中心である。認知度は9割近いが、当該の分野に通じていない場合は使用語彙ではない可能性があるため、理解度・使用度は8割とみなす。一部の語にはある程度の外国語の趣が残る。

レベル1や2に相当する語には、ビジネス現場で活用される語が想定されており、外来語の持つ新鮮さや先進性が感じられる語である。ただし、今回の調査はこれら2つのレベルに該当する語の収集は期待しにくいと考えられる。

以下においては、表1におけるレベル4およびレベル3の語を整理し、今回用いた資料の有用性を検証していく。

4. 「スポーツ報知 2020」の芸能面における外来語

4.1 全体の傾向

本稿では基本度の高い外来語の使用例を収集するデータとして、スポーツ紙の芸能面の記事を用いる。その理由は以下の2点による。まず、専門紙の一種であるスポーツ紙は一般紙ほど公共性が高くないため、世間で日常的に用いられる外来語を観察しやすい。また、表現や文体が通俗的な場合にも文法面での逸脱はほとんどなく、記事本文が完結した文で書かれている点も、例えばSNSで用いられる文章と比較すると適切だと考えられる。なお、スポーツ関連の報道は話題と語彙が制限されるため、あえて芸能面のみを対象とする。

データの抽出方法は以下の通りである。まず、データベース「スポーツ報知記事データ 2020」所収の2020年1月から12月の芸能面の記事本文(延べ語数1,322,684語、異なり語数33,639語)を調査対象として、データをテキストマイニングツール「KH Coder」を用いて形態素解析した上でカタカナ表記語を取り出し、Web茶まめ³の語種判別機能を活用して外来語を抽出した。その上で、テキストマイニングツールによって文脈での意味を確認し、分析対象の絞り込みを行っている。なお、以下は調査対象から除外している。

- ・アルファベット表記語、およびアルファベット略語 例. AD、CG、TEL、FAX
- ・人名や番組名等の固有名詞、またはその一部 例. インパルス、エア(ガール)

以上の条件により得られた異なり語数2,606語の外来語のうち、出現頻度3以上の1,357語を調査対象とする。

先述のとおり、本稿では表1に示したレベル3、4に該当する語を中心に抽出語の整理を行う。これらは社会生活を円滑に送るために必要な語が中心であり、当然ながらそのために特段習得の必要がない語は対象外となる。今回用いたスポーツ紙の芸能面のデータにおいては、芸能特

有の語を対象外とするが、それを特定することは容易ではない。ここでは便宜的に、芸能の話題に特化して用いられる語および現時点では芸能以外の話題に一般化されていない語を芸能関連語と仮定する。ただし、日常語と芸能関連語との中間には娯楽関連語とでも呼べる語があり、それぞれの境界は明確ではないため、暫定的に日常語、娯楽関連語、芸能関連語の3種に分類しておき、娯楽関連語と芸能関連語の判別と娯楽関連語の扱いについての妥当性を確認することとする。表2は、語例をそれぞれ最大3語ずつ抽出し、頻度（出現回数）別の分布をもとにまとめたものである。

表2 「スポーツ報知 2020」の芸能面における外来語

頻度	語数	日常語（頻度）	娯楽関連語（頻度）	芸能関連語（頻度）
201以上	41	テレビ (656) スタート (502) トップ (260)	ドラマ (1,071) タレント (478) アイドル (183)	該当なし
101～200	50	イメージ (181) チーム (140) ダブル (141)	アニメ (195) バンド (177) ソロ (153)	シンガー・ソングライター (107)
51～100	60	スーパー (94) スタイル (63) チャンス (57)	コメディアー (93) アプリ (68) ランキング (65)	オンエア (77)
11～50	434	ピアノ (41) パン (35) タクシー (14)	チャート (46) キャラ (30) トリオ (22)	フェス (33) クランクイン (30) アフレコ (22)
7～10	285	ネクタイ (10) チーズ (9) クラス (7)	アニメーション (10) リツイート (9) ギャラリー (7)	ゲネプロ (9) オフショット (8)
3～6	562	ジュース (5) ベルト (4) コップ (3)	ディスク (5) リピート (4) ペンライト (3)	イメージビジュアル (5) ロケハン (3)

頻度別の分布には偏りがあり、出現頻度50以下の欄に全体の約89%が集中している。最も頻度の高い語は「コロナ」(1,892)、次いで「ウイルス」(1,104)であるが、これは資料が新型コロナウイルスが感染拡大した2020年の記事である点で当然の結果である。そのほか新型コロナウイルス感染拡大に関連して使用された語として以下が挙げられる。

マスク (230)	リモート (212)	ステイホーム (94)
テレワーク (28)	ソーシャルディスタンス (24)	
(フェース) シールド (23)	アクリル (板) (17)	ワクチン (12)
ロードマップ (5)	アイソレーションガウン (3)	アラート (3)

このうちの数語は、2020年下半年以降改訂された国語辞書には掲載されており（大塚 2021,

2022)、もはや時事用語を超えて日常語となりつつあると言えそうである。

日常語については、頻度にかかわらず基本的な語が中心であるが、娯楽関連語は頻度 100 を境に徐々に特殊性が増す。芸能関連語については、結果的に限られた語数に留まり、「オンエア」「クランクイン」等使用歴の長い語が目立つ結果となった。表 2 に挙げた数語は大学生には既知の語である可能性も高い。芸能関連語が頻繁に使用されて認知度が上がり、一般的な娯楽用語に「昇格」とすると仮定すると、「芸能の話題に特化して用いられる語および現時点では芸能以外の話題に一般化されていない語を芸能関連語とみなす」という方法は再検討が必要だろう。

4.2 日本語学習語彙との照合

本稿での使用データはどの程度基本的なレベルの外来語を含むだろうか。これを確認するために、日本語非母語話者対象の日本語学習語彙との照合を行い、本稿の課題の 1 点目と 2 点目を検討する。

現在、日本語非母語話者の日本語能力を測定し、認定する試験として最大規模の試験は日本語能力試験 (JLPT) である。しかし、日本語能力試験は 2010 年の改訂後の級別語彙を公表していないため、便宜的にこれと出題範囲や構成をほぼ同一とする NAT-TEST⁴ の出題基準⁵ における「カタカナ語」リスト⁶ を利用して照合する。

表 3 は、「カタカナ語」リスト掲載の 701 語から、漢語や混種語、アルファベット略語を除いた 685 語について、本稿で調査対象とする出現頻度 3 以上の語との一致度を級別にまとめたものである。

表 3 NAT-TEST 「カタカナ語」と頻度 3 以上の語との照合結果 (級別)

級	1 級	2 級	3 級	4 級	5 級	計
出題基準中の全語数	168	132	151	145	89	685
本稿データ中の語数 (一致度)	80 (47.6%)	83 (62.9%)	98 (64.9%)	97 (66.9%)	63 (70.8%)	421 (61.5%)

本稿のデータとの一致度は 1 級語彙で 50% を若干下回るが、下位級に向かうほどその度合いは高くなり、5 級語彙では 70% を超える。その大半は表 2 で「日常語」に分類した語であり、また出現頻度 200 を超える高頻度語においては、「芸能関連語」にも NAT-TEST 出題語彙が見られる。逆に、NAT-TEST 出題語彙のうち本稿のデータと一致しない語は、食品に関する語 (「ウィスキー」「ドレッシング」「ビスケット」等) や現在は使用頻度が低下傾向にある語 (「オルガン」「ネガ」「ハンドバッグ」等) など、スポーツ新聞の芸能面には見られない語が中心である。

次に、表 3 に示した語を表 2 で示した頻度の区切りに沿って一覧にまとめたものを表 4 に示す。

表4 NAT-TEST「カタカナ語」と頻度3以上の語との照合結果(頻度別)

頻度	語数	NAT-TEST 学習語彙	内 訳					
			5 級	4 級	3 級	2 級	1 級	該当なし
201 以上	41	31 (75.6%)	4	11	6	6	4	10
101～200	50	21 (42.0%)	2	0	9	4	6	29
51～100	60	26 (43.3%)	5	6	9	3	3	34
11～50	434	178 (41.0%)	28	43	42	34	31	256
7～10	285	60 (21.1%)	10	15	12	11	12	150
3～6	562	105 (18.7%)	14	22	20	25	24	457

頻度 201 以上の語群は、75.6%が NAT-TEST の学習語彙であり、極めて基本度の高い日常語が多く集まっている。これより頻度の下がる頻度 11～50、7～10、3～6 の 3 段階については、その 4 割強が学習語彙に相当していることから、本資料はレベル 3、4 の語を抽出するのに妥当であると判断できるだろう。

4.3 未知語とその扱い

本稿で使用するデータは茶釜 (IPADIC) の解析結果に基づいて品詞分類を行っている。解析用辞書に未登録のことばは「未知語」として抽出されるが、これらは新語である可能性が高いと考えられる。本稿のデータに含まれる未知語 140 語は、おおむね以下のように分類できる。

- ・一般的新語「トランスジェンダー」「ナビゲート」「アウトロー」
- ・若者の使用が多い新語「インスタライブ」「マッチングアプリ」「ガールズユニット」
- ・専門語「メニエール」「エリテマトーデス」
- ・略語やその一部「ドラ (「連ドラ」)」「ジャケ (ット)」「アラサー」「コスメ」
- ・長い複合語「チーフクリエイティブアドバイザー」「メンズスキンケアブランド」

上記で一般的な新語に含めた中には、外国語 (英語) として使用されていた語が外来語として定着した例 (「ムーブメント」「センシティブ」「シャウト」) が多く観察される。これらがスポーツ紙芸能面特有の表現方法によるものであるのかどうか、他の媒体の使用例を比較して考察する必要があるだろう。これについては、稿を改めて考察したい。

4.4 その他の問題点

最後に、本稿において解決できなかった問題点を整理しておく。

表 2 において、抽出語を日常語と娯楽関連語、芸能関連語に整理することを試みたが、その過程で数点の問題が見出された。その一つがこれらのうちの複数にまたがる多義語の扱いである。たとえば「センター」はスポーツ新聞の芸能面では「14 歳からセンターを務める」のようにアイドルグループにおける中央のポジションを指す意味での使用が多く見られる。日常語としては「セ

ンター」を単独で使用することはまれであり、「ショッピングセンター」「○○文化センター」などのような複合語の要素として用いられることが一般的である。この種の事例の扱いについては、他の資料も用いて改めて考察したい。

その他、芸能関連での使用から発した意味用法が他の分野に転用される例（「スピンオフ」など）も見られたが、若い世代に馴染みのある用法であるだけに今後一般化される可能性も否定できない。その点で、多角的な考察が必要であると考えられる。

5. おわりに

本稿では、大学生が社会で求められる外来語を十分に習得するためのツール開発に必要な外来語語彙のレベル別整理を目的に、特にその下位レベルに相当する基本的な語彙をスポーツ紙の芸能面から抽出することを試みた。日常語として出現頻度順に日常語と芸能関連語、そしてその間に位置する娯楽用語に整理して全体を概観するとともに、日常語と日本語非母語話者対象の日本語学習語彙との照合を行った。

ここで考察結果を踏まえ、冒頭で掲げた3点を確認したい。まず、「(1) スポーツ紙の芸能面に出現する外来語を、基本的なレベルの外来語データとして使用すること」の妥当性については、出現頻度が200を超える語から出現頻度3の語に至るまで日常生活で用いられる基本度の高い外来語を収集できた点で、概ね妥当だと判断できるだろう。また、(1)の検証方法に際する「(2) 非日本語母語話者対象の日本語学習語彙との照合の有効性」については、NAT-TESTの「カタカナ語」との照合結果から、ある程度有効であると考えられる。しかしながら、「(3) 大学生には習得不要な外来語の範囲」の制定方法については、その境界線が明瞭ではないこと、時期により変化する可能性があることが示唆された程度で、明解な結論を導くことはできなかった。

さらに、細かな考察を十分に尽くせなかったことによりいくつかの問題が残された。日常語と娯楽関連語、芸能関連語の判別、未知語と判定された語を手がかりとした考察、多義性の高い語の扱い、そして芸能関連語の一般化などについては、今後の課題として引き続き検討していきたい。

〔注〕

- 1 『例解国語辞典』『角川国語辞典』のほかに『言海』（1891、外来語1.4%）の語種比率を示しているが、これには古語が多いこと、それが和語の比率が高い（55.8%）要因である可能性を指摘している。
- 2 「外国語の趣」は、共同通信社『記者ハンドブック』における表現に倣ったものである。
- 3 <https://chamame.ninjal.ac.jp/index.html>
- 4 その元となっている「日本語学力テスト（Nihongo Achievement Test）」の頭文字が由来となっている。
- 5 日本語 NAT-TEST、日本語学力テスト運営委員会編著（2014）
- 6 NAT（2014）p.330-341 掲載、漢語（「ケータイ」）や混種語（「消しゴム」）は対象外とする。

〔参考文献〕

- 相澤正夫（2012）「『外来語』言い換え提案」とは何だったのか」陣内正敬ほか編（2012）『外来語研究の新展開』おうふう、133-147
- 大塚みさ（2018）「学生の辞書利用の実態について的小調査6—外来語とスマートフォン—」『実践女子大学短期大学部紀要』39、87-96
- （2019）「辞書の代替物をめぐる一考察—ファッション雑誌記事の外来語を用いた予備調査—」『実践女

子大学短期大学部紀要』40、57-67

(2021) 外来語の「新語」とその使い分け—新型コロナウイルス感染拡大の影響による語の使用を例として—『歌子』29、113-126

(2022) 「新型コロナウイルス感染拡大による新語・新語義の一考察」『歌子』30、117-126

共同通信社（編著）（2022）『記者ハンドブック 新聞用字用語集 第14版』共同通信社

陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』世界思想社

陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編（2012）『外来語研究の新展開』おうふう

中山恵利子（2003）「介護現場のカタカナ語」『日本語科学』13、58-78

(2015) 「現代日本語における外来語」沖森卓也・阿久津智編著『ことばの借用』朝倉書店、106-144

日本語 NAT-TEST・日本語学力テスト運営委員会編著（2014）『新訂 品詞別・1級～5級別 1万語語彙分類表』専門教育出版

野村雅昭（2004）「漢字に未来はあるか」前田富祺・野村雅昭編『朝倉漢字講座5 漢字の未来』朝倉書店、221-240

林大監修（1982）『図説日本語』角川書店

文化庁（2013）『世論調査報告書 平成24年度国語に関する世論調査〔平成25年3月調査〕』

文化庁（2018）『世論調査報告書 平成29年度国語に関する世論調査〔平成30年3月調査〕』

茂木俊伸（2019）「外来語の氾濫と定着」田中牧郎編『現代の語彙—男女平等の時代—』朝倉書店、32-42

山口仲美（2006）『日本語の歴史』岩波書店